

ほんにかえるプロジェクト会報 2016年1月創刊

# かえるのうた

| 1

第23号 2021・10月

ほんにかえるプロジェクト発行

編集責任者：汪 楠



受刑者作品 会員番号 A042 Y.K.

中秋に あわき月あり うつし世の  
晴れぬころと 流れゆく時

PJ代表 田中 伸彦

いつの間にか秋風が立ち、コロナ禍の閉塞感に心の晴れない日々が続きます。

皆さま如何お過ごしでしょうか。

コロナ禍での暮らしが2年近くなり、人びとの生活の中で刻まれる“時”のリズムが2年前とは大きく変わってしまった人も、少なくない事でしょう。

内部会員の方々も外部会員も、それぞれの時の流れの中で、それぞれの“今”を懸命に過ごされているのではないのでしょうか。

人はその置かれた環境や、個々の感受性の有り様や身体の状態によって、自身を取り巻く時間の速さや密度に、それぞれ独特の違いがあるのではないかと思います。

ただ誰にとっても、喜びや愉しみが続いている時間は、あまりにも早く流れ去り苦痛や猜疑心にとらわれてしまった時間は、いつまでも己を捉えて離さずに続きます。

一人ひとりに与えられた時間は、決して時計の文字盤や、太陽や月のもたらす天体の動きの中にあるのではなく、それぞれ固有の“時”があり、絶えずその人の精神と身体を包みこんでいるのではないかと考えます。

最近、お二人の方からお便りがありました。

お一人は近々出所の方で、もう一人の方はまだ暫く収監されていると言う事でした。

それぞれの方の過ごして来た“時”と、これから待ち受けているであろう現実の”時“がどんな風に彼らを包み込むのか、想像もつきませんが“時”は必ず彼らを此処ではない何処かへ運んで行きます。

ほんにかえるプロジェクトからの本が、思い通りに届かない方もいらっしゃるかも知れませんが、これからの季節、読書は日々の暮らしの中に安らぎと愉しみをもたらしてくれる貴重なひと時です。

“書物そのものは、君に幸福をもたらす物ではない。

ただ、書物は君が君自身の中に帰るのを助けてくれる “

# ロゴセラピーと 無期囚の生きる意味

PJ スタッフ 大塩 志野

(前号からの続き)

## 2. ロゴゼミナールでの汪さんとの出会い

精神科医である石川さんの話を聞いた同年の2017年9月2日、わたしは日本ロゴセラピスト協会が主催した講演会に、続けて9月16・17日には第2回東京ロゴゼミナールに参加しました。

大きな動機は2014年にフランクル著『夜と霧』を読んで深い感銘を受けたこと、2015年に職場の尊敬する先輩が鬱で自死をし、わたしにとっては人生で最大と言っているほどの喪失を経験したこと、その後導かれるようにロゴゼミの先輩でもある河原理子さん（元朝日新聞記者）が書かれた『フランクル「夜と霧」への旅』を読み、日本でもロゴセラピーを学ぶ場所があるということを教えていただいたこと、が挙げられます。

講演会や最初のロゴゼミでは空気感がとても良いなという印象が残りましたが、話される内容はかなり難しく感じましたので、これはゆっくり時間をかけて学んでいくものだどと覚悟を決めたのを思い出します。

4か月ごとに行われるゼミは忙しい

日々の中での学びとしてはちょうどよいスパイスのようで、毎回とても楽しみに参加し、だんだんとおしゃべりをする仲間も増えていきました。

ゼミに参加するようになって3回目の懇親会で汪楠さんという方の近くに座り、いろいろ話をしているうちに私が社会福祉士の資格を持っていることに興味を持たれ、次の日のゼミの終了後にぜひ話を聞いてほしいと声をかけられました。ゼミの参加者はみな自分で好きな肩書きを付けて自己紹介をするのが習わしですが、汪さんの肩書きは「受刑者更生支援団体主宰」というもので、名簿にはそうあっても自己紹介の時間には彼は現れていませんでしたので、よくわからないままに汪さんの話を聞いたのでした。

とにかく汪さんは十何年か刑務所に入っていて数年前に出所したこと、自分は多くの支援者に支えられ、塙の外から送られた本を読むことでもう一度生きなおそうと思え今に至ること、同じようにまだ服役中の受刑者に生きていてもらいたいと刑務所に本を送る活動「ほんにかえるプロジェクト」をしていること、団体設立から2年が経過し活動団体を社団法人にしたいから有資格者に協力してもらいたいことなどを、お酒を飲みながらいつまんで話され、全貌はつかめないながらも汪

さんの屈託のない笑顔に、十何年も勤務所に入っていた人がこういう顔で笑うのかと妙に感心してしまったのを覚えています。

社会福祉士を持っているとはいえ、一介の福祉施設職員であるわたしに何ができるのだろうと思いつつながら、汪さんのお誘いにとっても良いものを感じ、団体の形式上の代表者（汪さんは国籍や就労ビザがないため会社や団体の代表者にはなれないのです）や関係者にも会いました。法人化の手続きは難しくても本の整理や発送の作業は本当に楽しく、月に1回は土曜日に事務所に出かけていき、時には汪さんと二人、時には別のボランティアの方も一緒にあれこれおしゃべりしながらの作業は今も継続しています。出所したばかりの方が事務所に寝ていたり、お金やものがなくなるなどのトラブルがあったり、びっくりするほど整理整頓されていたり、行くたびにいろいろな動きがあるので毎回新鮮です。

私が関わり始めてから2年が経過しますが、だんだんと本の送り先の会員の名前を覚えていき、これまでも、またこれからも会うことはないであろう無期囚の方がだんだんと近い存在になっていることに気がつくのです。

一方、汪さんに出会った頃、私は家

族に関して心配事を抱えていました。私には3人子どもがおりますが、末っ子である次男は幼少期には少々落ち着きがないやんちゃな子供で済んでいたのが中学校で次々と問題を起こし、なんとか入った高校も2年の途中で部活の顧問とトラブルになったことがきっかけで行かなくなり、ついに2018年1月に退学をしたばかりでした。3人兄弟の中でも一番人懐こい性格でしたので、その彼がすさんだ目つきで暴言を吐いたりすることは、反抗期だと割り切りながらも、母としては複雑な、なんだか手の届かぬ遠い所に行ってしまうような思いがありました。他愛のない親子のコミュニケーションはかろうじてつないでいながらも、毎晩夜遊びで出かけていき、タバコを吸い、髪を染め、よくわからないお金のやり取りをする姿には正直言いようのない不安を感じていました。学校からの呼び出し、警察から補導の連絡は何回受けたかわかりません。そのたびに職場から中抜けさせてもらい、謝りに行きました。本人はそのたびに明るく「わりい、わりい」と言っていました。かなりエネルギーを消耗する毎日でした。中学の時の友達は高校に入ってから暴行事件で鑑別所に入ったらしいという話を屈託のない顔で話してくる次男に対して、なんと返事をしてよいのかもわ

かりませんでした。彼は学校という仕組みにはまったく沿うことはできませんでしたが、友達は大好きで、家族とけんかして帰る場所を失った友達を公園で世話し、ときどきこっそり洗濯物をうちでしてやっていたので、うちに連れてこさせ、一緒にご飯を食べたことも数回ありました。暴力を振るわれることはあっても、自分から誰かを傷つけたりはしていないことは信じていましたが、高校もやめてしまった後はどうなるのだろうと本当に不安に思っていたものでした。それに対しても私の心配を見透かすように「お母さん、心配しないでよ。オレはずっと家にいたりはしないからね。」とニカッと笑い、確かに言った通り毎日せつせとバイトに出かけ、もらったお金で夜遊びを繰り返していました。

汪さんの事務所で行う作業の中で一番楽しいのは、会員さんが欲しい本のリストを見て事務所の本棚からお目当ての本を探し出す時です。何年かで出所される方か、無期懲役の方かはわかりませんが、欲しい本のリストにはやりたいこと、食べたいもの、行きたいところ、欲しいものがとても分かりやすく列挙されていて、頭の中に思い描く光景まで手に取るように想像できて微笑ましいものがあります。汪さんはそのリストを見ながら「実際に出所す

ると、これのほんの少しもできないんだよね。なんていうか、お金の問題だけではなく、できないんだよね。」とボソッとつぶやいていました。それでもその希望するリストにこたえるために本を探しだし送り続けるのです。

「ほんにかえるプロジェクト」では本の発送作業だけではなく、小冊子の発行もしています。会報である『かえるのうた』はすでに20号を超えています。また、汪さんの幼少期の自伝『我的童年』、刑務所内から書き続けた『獄中書簡集』は寄せ集めの紙で印刷し、製本も手作業で行い、1冊500円で販売し活動資金に充てています。

『我的童年』も『獄中書簡集』も刑期中の汪さんにしか書けなかつただろう文章です。思いつくままに、ほとんど推敲の跡も見られないかなり粗削りの文章の中で、純粹に人を求め、理解されたいと願い、また自分で自分は何者なのかを確認するためというように幼少期の記憶の中の足取りや精神の紆余曲折を赤裸々に表現しています。この手紙を読んで返事を書く人々が存在したからこそ、この自伝や書簡集は世に現れ、手作りながらも本の形にまとめることができているのです。やり取りをした人物について、汪さんは多くを語りませんが、2冊の前書きの中で、次のように述べています。

—私は2000年の8月に逮捕され、2014年の5月に満期釈放されるまでは収監されていました。長い受刑生活の中で多くの支援者のサポートを得て反省と更生について考えてきました。その一環として自分と向き合う作業に取り組み、支援者たちに励まされる形で少しずつ自分のことを話すようになりました。それは手紙形式で刑務所から外部に発信され、蓄積したものを手記という形でまとめてくださったのです。—（『我的童年』より）

—なお、私が手紙を書く時、刑務官に検閲されるのを意識して、わざと読みにくい文字で書きました。それを読み解き、テキストにするのは至難の業と聞く。改めて支援してくださった方々にお礼を申し上げます。

さらに、編集に関わり、寒い冬に暖房のない大学でともに印刷してくださった松永氏のご冥福をお祈りします。

松永氏とは岐阜刑務所で知り合い、前後して出所しました。ほんにかえるプロジェクトの活動趣旨に賛同して献身的に参加してくださいました。『我的童年』を印刷しながら松永氏は「私も自分のことを書き、こうして読んでもらいたかった。」とボソッと言ったのを今でも覚えています。—（『獄中書簡集』より）

また、『獄中書簡集』の中で、印象的

だったのは次の箇所です。

—面会とともうれしかった。面会のたびに思うのは、大げさに言えばこの地球上でまだ私を知る者がいるという安心感？ 時に感じるのだ。私は刑務所の中で生まれ育ったのではないかとか、塙の中にいるべき存在で、一時期たまたま外にいたんではないかとか。う〜んと離れてしまうけどどこに生まれどうして今ここに居るのか、考えることがいっぱいあるのだ。考えている私は宇宙漫遊しているようなもので、それがときどきこの世で知り合ったはずの方々と会うときだけ絆を実感することで私は現実に戻ってくる？ ような、こういう表現でわかりますかな。煩惱の中にいるから、煩惱があるから生きているという表現の仕方があるけど、その仏教的な考えが正しいなら、なぜその煩惱を無くし解脱し、悟りを得る必要があろうか。

絆、本当に良いものです。それこそアイデンティティではないでしょうか。感謝しています。

—アイデンティファイの意味をまだ理解できていません。（カタカナ語辞典にはのっていますが）やはりアイデンティティの確認という意味で覚えたほうがいいですかねえ。日本語学校の話、母国の言語を学ばせる必要は絶対にある！ うまくは言えないが、出自を否

定されては人間は生きていけない？  
 私はこういう考えに基づき、成人後、  
 不仲のままでも父を非難する言動を控  
 えるようになった。それでも我が父、  
 我がクニ。むずかしい問題だ。〇〇人  
 だからみたいなの“くる言葉”がお  
 嫌いなようですが、しかし、マイノリ  
 ティはまさにくくられる側に立たされ  
 ているのだ。JOさんがどう言おうと  
 私の経験ではワンという個として見ら  
 れることよりもずっと中国人だからと  
 見られるほうが多い。その都度私は自  
 分の中で叫ぶ。私は中国人の代表では  
 ない。なれないし、なりたくもない！  
 そして相当親しくならないと個として  
 見てもらえないのも実情。それも中国  
 人が嫌いだけど汪が嫌いじゃないとい  
 うレベル。分かりますか。日本人は嫌  
 いだけどIさんやJOさんは嫌いじゃ  
 ないと私は思いもしない。私の中では  
 あくまでも、両方のような人を私がた  
 くさん知っているから日本人を嫌いに  
 ならない。そうだね、深く分析してい  
 けば犯罪人の自分でも、この私を通じ  
 て中国人を知ってもらえば、そして好  
 きになってもらえば、という思いが私  
 の中にあるようです。この思いを犯罪  
 に走る面の矛盾に苦しめられる私もあ  
 ったが、悪になっても強く生き延びた  
 い？思いもあって、破壊したい欲？理  
 解されたい自分？「中国人」っていう

ことにどのくらいの重みがありますか  
 というご質問。重みなどないよ、重み  
 を感じてはいけないし、感じたら生き  
 づらくなるのじゃないかな。やりきれ  
 ないことが多いとのことですが、そう  
 感じられるのも幸せの一つですよ。無  
 学でも無知ではないと思うことにして  
 いるのだ。こういうときには、こんな  
 話をしたときに一般市民を愚民とみな  
 しているだろうとI先生に指摘された。  
 凶星でした。そしてI先生本人もこの  
 愚民意識をもっているかと思えまし  
 た。

汪さんの、この溢れるような思想と、  
 人を求めてつながりを確認することで  
 自分の存在も確認している文章を、私  
 はとても好きだと思いました。制約の  
 ある環境と、書簡という形式のやりと  
 りだからこそかもしれません、自分  
 を分かってほしいという存在と、なん  
 とかそれを受け止めて理解したいとい  
 う存在の両方をとても愛おしく感じる  
 ことができたのです。家族や恋人とい  
 う関係とはまた違うところで、相手を  
 求めている思いは本当に表れており、  
 それは一つのわがまま、甘え、依存、  
 従属でさえあります。それでもその中  
 に安らぎを感じている汪さんの文章に  
 心打たれたのです。

このように、実際に汪さんと出会い、

手記を通して幼少期の汪さんとも出会い、大人や国や経済や文化に翻弄されて十何年も刑務所に入りながら本を読み、ものを考え、塙の外の支援者と心の内をやり取りする塙の中の汪さんとも出会ううちに、我が家の心配事である末っ子は、そんなに心配する存在ではなくなっていました。いつ重大な犯罪に手を染めてしまうかわからない、いつ少年院や鑑別所に行ってもおかしくない危うさがなくなったわけではありません。わたしにとってはその危ういままでかけがえのない我が子であり、そのまま大切な存在なのだと思うことができるようになったのです。

直接汪さんに末っ子の具体的なことを話したことはありませんが、月に1度のペースでかえるプロジェクトにかかわることで、何か起こったら汪さんに相談すればいいとゆったりと構え、もし刑務所に入ってしまったとしても、母親としておしゃれをして笑って面会に行こう、楽しい話をいっぱいしよう、可能ならば美味しいものの差し入れをもっていこう、そしてその先の将来も真剣に考えようと思えるようになったのです。他人から見たら不器用な人生にも必ずその先があると確信するからです。

(次号に続く)

## <N さんの手紙を巡って>

PJ スタッフ 庄子佳代子

私は若い頃「死刑囚と無期囚の心理」(小木貞孝/1974)という本を読みました。著者小木貞孝(加賀乙彦)が千葉刑務所で調査した無期囚、本人が医務技官として在職した東京拘置所の死刑囚、重罪被告について三者の拘禁症を比較研究した論文です。無期囚の71%に拘禁反応が見られたとあります。“刑務所ぼけ”と呼ばれる主な症状は、「感情麻痺」:感情の起伏が狭く、無感動、従順、単調な生活に飽きることがない。「退行」:子どもっぽい依存傾向、が上げられています。

これを読んだとき、犯罪者とはいえ、長期に渡って生活の全てが権力によって支配され、排泄までも管理される状況への順応によって、人格が変えられていく様子に暗澹たる思いがしました。

それから数十年後、汪さんとも出会い、思いがけずかえるPJを通じて手紙のやりとりをするようになった方達の多くが、無期囚でした。漠然とゾンビのようなイメージに包まれていた無期囚の1人1人は、それぞれに個性豊かで、私はたちまち手紙を読む楽しみにハマりました。

そこである日、かつての無期囚イメージからは程遠いやんちゃで明るいNさんに恐る恐る無期囚の心理について聞いてみたところ、Nさんは丁寧に答えてくださいました。

「無期の者の事はハッキリ言えますが、確かに“非常に引き延ばされた時間を生きている”は正しく、それにより歪んだ拘禁病が発生しボケる人もいますが、何より死んだように生きている。ゾン



ビのような人間になる者の方が多いい気がします。私としては、いくら出れようが出れなかりょうが我慢は大事ですが、男は捨てられませんから。そう思っている人は庄子さんの本の無期には当てはまらないと思います。」と述べ、彼が考えた無期囚の5つのタイプを上げました。5つのタイプは「出所の希望」を生き方の中にどのように位置づけるかという点で分類され、無期囚の「出所」についての深い葛藤がうかがえます。彼自身は出所を信じて生きたいけれど、「先の光を見ても暗闇にガッカリするだけ」なので迷いつつ生きている。だから先のことより足元を見て「私は今、友や大事な人間との約束もあるので、とにかく懲罰になるようなことはせず、・・・毎日明るく人の信頼と大切な私の資産を失わないように、だけど男は捨てずに生きてます。」と心情を語ってくれました。

次の手紙でNさんが大切にしている友との信頼関係、明るく振る舞う態度について、アウシュビッツの体験から得た فرانクルの“態度価値” — 現実に対する自身の「とる態度」によって実現される価値、についてどう思うか、そして「男を捨てない」とはどんなことか聞いてみました。

Nさんはフランクルの考え方に共感を示しつつ、心に留めている一つの言葉を紹介してくれました。“心に自分だけの城を持って” — どこにいても自由に、心だけは誰にも侵略を許さず、誰にも文句を言わせない城をもて！「この無期という刑に負けてなるもんか！という負けず嫌いの気持ちが緩やかに

変化したものではないかと思います。」と述べています。そして、「私の“男”とは、2つあって、見えるものと見えないものがあります。とはいえ“見えないもの”が大事で“見えるもの”はオマケ・・・私が思う“男を捨てない”とは自分がどれだけ損をしようが、皆が間違いだと言おうが、自分の大事な者、大事なものの為には立ち上がることです。“見えるもの”というのは身だしなみです。・・・まっ、何にしましても信念をもって生活することです。」と結んでいます。

(上記のNさんの手紙は21号に掲載)

Nさんからはこの件でまた手紙をもらいました。「私自身無期という縛りがあるのだから、本当は恰好つけたり“男”なんて捨てた方がいいことはよくわかっています。」「自分の為、出所の為には頭で考えるのは簡単ですし、どうしたら良いのかだっかってわかってるつもりです。“男は捨てない”という言葉を使いましたが、本当のところは考えて動いているのではなく何か事があった時、身体が勝手に動いている感じで“男が捨てられない”のかもしれない(笑)」

そうですね！私たちはいろいろなことを判断したり選んだりしているようで、実はそんなに考えないで動いているし、そこに性格や育った環境、文化から得た自分らしさが現れます。好きな自分もあれば、変えたくても変えられない自分もいますね(庄子)。

彼の手紙には数名から、共感や反論の手紙が寄せられました。中でも長文のお二人の手紙を紹介します。

## 反響の手紙 その1

「かえるのうた」の中で庄子さんとN氏の手紙を拝見して、どうしても書きたいことがあります。というよりも庄子さんからN氏に伝わらないのかなあとの思いがあります。

このN氏は無期囚で以前まで素行不良の多い方だったとのことですが、最近目を覚ました感がうかがえますが、根本的に間違っていると思いませんか？現在は出られると信じるようになってますし、懲罰は受けないし工場を変わらない事を胸に生きてるとのことですが、けど男は捨てずに生きるとか恥ずかし気もなく言ってる時点で出所は無理ですよ。馬鹿を言うのも程々にしてほしいと、腹立たしくもあり、鼻で笑う私もいます。

出所をしたいと考えるなら第一に捨てなければいけない考えですよ。N氏の言う男を捨てないということは、仲良し同僚がケンカになった時加勢するということですよ。絆を優先するということは、そうゆうことです。

現に私が同じで仲間がケンカしてたら無条件で加勢します。これは私が有期刑だからということがあります。もし無期で出る気があるなら仲間を作らず、死ぬ程真面目に生活するのが当然ですよ。それを出る気があるけど男は捨てられない、仲間は作る、ふざけるのもいい加減にしてほしいです(怒)。読んでいてかわいそうにも思えます。

無期刑という重罰を背おう者なら男は捨てられないというのではなく、己を殺して耐え難きを耐え、忍び難きを

忍ぶのが必要ですし、四六時中罪と向き合わなくては出所など見える訳がありませんよね。この方は大事な人が馬鹿にされたり、家族や子供のことまで言われても無期だからと我慢してる者がいて、許せないとまで言ってるし、性格上それなら死んだ方がましとまでいって、こんな器の小さな人が出所できる訳がありませんよね。

無期だからと言って我慢してる人がいるとのこと、正にその人こそが正しいのですよね。見栄を捨て、男を捨て、馬鹿になり、ひたすら真面目に生活するしかないのが、無期の務めだと思いませんか？確かに身だしなみは大切ですが、それより大切なことがあるでしょう。庄子さんに恥ずかし気もなく語るこの大馬鹿者に分からせてやって下さい。完全に自分を柵に挙げて書きましたが、ここまでズレた考えの人間がいるのかと驚いた反面、だからこそ無期になったのだなと納得しました。受刑生活の厳しさを実感しているので痛い程分かりますが仲間の存在の大切さも、家族の大切さも、我慢することの辛さも、好きな物を食べられない辛さも、愛する者に会えない寂しさも十分感じていますから... (汗)。現在の私のように昼夜独居指定になり、仲間をあきらめ、自由に気楽に出所日を待つ身なら別ですが、集団生活とは気の遣い合いですよね。相手を想いやることで成り立つのです。

思いやりの足りない私は失敗ばかりですから... (苦笑)。雑居向きではありません。

私の現在の支えはかえるの皆様をサポート

一トだけです。家族も友達も連絡していません。本だけが支えであり、友達ですよ。ww 寂しい限りですが、これが私の築いてきた人生です。何もないのが今の私です。人をどうこう言えた立場じゃありませんが、N 氏のような人のことを知ると、私よりかわいそうだなあと思います。全てを捨てて頑張っ  
て、出所してほしいです。こんな所で死ぬなんてご免です。そうなってほしくないなので勝手に言わせて頂きました。このような手紙のコンテンツを目の当たりにして、庄子さんは悲しくないですか？寂しくないですか？庄子さんのように人の為に生きている方にとっては信じられない考え方ではありませんか？きっと、そうだと思いますよ。この方を反面教師にして生きられたらと思います。私は出所してひたすら働きます。一步一步確実に失ったものを取り戻し、笑って死ぬのが目標です。

それまでのプロセスに PJ の皆様と会って感謝を伝えるのが外せませんけどね。私は今までこんな寂しい思いをしたことはありません。だからこそ焦るし、取り戻したいし、PJ のサポートの重大さが身に浸みているのです。本当に、本当に、ありがとうございます。

## 反響の手紙 その2

「かえる」読んだ!!!人の考えは色々だね。佳代子姉は元気にしてる？オレは元気！3/5~4 月下旬までコロナのクラスターで全面休止となり、生活の全てにおいて止まった状態だったんだよ！毎日 2 畳半のへやで座って生活してたのさ！今年はアスクレピアスのお

花 6 コも咲いてくれたんだよ！300 円の切り花で 4 年も一緒に生きてくれたんだよ♡ 切り花おそろべし生命力だよね！

無期の人の人生観はの人それぞれで 1~5 だけではないと思うけど、そもそもが求刑も無期で、そのまま無期にしても求刑死刑で無期になった例にしても、堂々と外へ帰れると考えてる時点で考え違いをしてると思うし、何をもって事件をおこし一生逃げきれると想ってるのか、又今度は上手くやろうと想ってるのか、腹をくくり己の命をもって（事件にしても償いにしても）とりきれない全ての責任、責務を背負おうとするのか、事故であれ、何であれ、人の命を奪い取ってしまった事実はかわらない。

その中で出口が見えないのは当前の己の結果であって誰のせいでもないし、アウシュビッツもホロコーストも囚人じゃない中での命の光りをさがす事であって、命の根本的な尊厳は同じでも「事にいたる道程」は全く違う。

フランクルの考えを心にきざむのもいいし自由だけど「己が何をしての現状」かをオレも含めて無期にしても有期にしても常に頭に入れて生きてかないとダメなんだよ。男を捨てずに鼻毛も出てるやつや、くつ下、パンツ、やぶれてるやつを見て笑う前に、オレたちは自分の「小さいプライド」では我慢出きないとか、それだけはゆずれないなんて事を言わず、相手の事を考える心のゆとり、多角的に考えられる心をもたなくては、何度死んだって、そんなんじゃないよ何 1 つ変わらないんだよ。

家族は大事だし絆は大切だけれど、それが出来ないから、できてこなかったから、今、この無期や死刑刑罰であつて以上も以下もない今なんだから。ジョーダンで家族の事言われて我慢も出来ず許せないなんて言ったら、外に帰っても又すぐ「こっち」へ帰ってくるよ。

佳代子姉？何よりも大事な誇りって何？自分のプライドを守り抜いて重んじて、家族を食べさせて行けるん？この人はそのプライドも考え方も有るのに、今家族は、このプライドでよるこんで生活出来てるん？死ぬ程ゆるせない事を外でこの人の家族は世間から、うんざりするくらいメディアでタタかれ白い目で見られ、子供たちは学校で、奥さんはパート先で事件の事がバレるたびに批判されてるんだよ。多分。

何かさあ、仮釈もらう為にガンバるとか、オレは捨てられるのがイヤで常にイエスマンで人を殺めてまでも、それでも捨てられて、野良になるのイヤだったし、何か、似てる気がしてイヤになる。仮釈にしても、毎月自然に穏やかにすごし、その積みかさなつた年月の結果であつて、「その為だけに作った生活」じゃないし、人を殺してしまつて、又、外で人として暮らせると初から考えてもいないし。

だからとひらきなおつて生活するわけではないの。この中で、前も書いたけど、お花みて、毎日一緒に生きてきて愛しく想えた時、はじめて、今まで心のゆとりなく生きてた気がしたの。どれだけお金有つても、女の人抱いても、いざそれで心から穏やかで幸せだ

つたかと考えると、口でどれだけ家族を大切だ、愛しいって言った所で、ここに居る事実からすれば、結果的に何一つ大切にしていられず守つてもあげられていないんだから。

外に居た時は長く生きる事よりも、まず第1に「彼」に家族から捨てられない事であり、一瞬一瞬を生きてるだけの何者でもなかったよね。いい車乗つても2~3ヶ月ですぐに乗りかえ、声を掛けられれば、なりゆきにまかせ女の人とあそぶし「彼」に言われるままに人を傷つける。本当に狂ってるんだよ。命に対するハードルはどんどん低くなるんだ。だから「彼」はエスカレートする。オレに指示すれば何でも片がつくと思い込む。それこそ「男を捨てられない」なんて事はなかったし、人間すら捨てても見捨てられたくなかつたし、使えないヤツと想われたくなかつた。

逆にずっと指示で傷つけたり奪つたりしてた分、この中でどれだけ腹が立つても、「人を殺す事とはどういう事か」を知っているから、そこまで腹の立つ事もないし、自分の感情でイライラした事ならば、納得してガマンが出来るんだよ(笑) 何言ってるか佳代子姉にはわかんないだろうけど、「恨みのない人を殺害」する方が自分を保つのがムズかしい。そんな事をするたびに心が死んでくし、周りの景色や自分の周りの全てが違うものに見えてくる。自分が自分でなくなるのが自分でわかる。そのたびに目付きがかわるのがわかる。確かに自分の誇りは大切だし、もつていなければならぬものだけだ。

何事もキレイ事では生きてけないし、お金なければ家族を守れないけど、もう、ずっと前に元妻にね、「私や子供たちを、あなたが暴力を使って守ってくれるよりも、どんな時でもいつもそばにいてくれるだけでいいし、もしも万が一傷つけられた時、それでも仕返しよりも、ずっと抱きしめてもらい声をきかせてくれるだけでいいよ」って言われたよ。本当のイミで守るって言うのは、どんな時でも何が有っても一緒に、そばにいてくれる事だって言われたよ。力もお金も有ってこした事はないけど、それはあくまで「あればいいね」くらいだって。男を捨てないもすてるも一つの考えだし、見方も色々だね。穴あきくつ下はいててもパンツやぶれていようと、どれだけいくじなしの男であっても、外で家族と笑顔でいられる人はすごいと思うし、一緒にいる女の人もスゴイと思うよ、オレは。互いに理解しあえてる人たちは立派だと思う。すごくうらやましいよ。男の人でも女の人でも自分の考える道徳心と自己満足を混同して考え、それイコール正しいって考えは又違う方向へ行っちゃうし、単に人におしつけるだけになってしまうから、中々ムズかしい事だね。毎日毎日が、人に少しでも近づける様に、人間の心に近づく様に、人としての根本を学ばされっぱなしです。オレは。

佳代子姉！オレにしても、他の無期の人にしても、そりゃ、多少なりとも周りの環境や、育って来た環境も影響してる事も「有るかもしれない」けど、それでも「この中」へ入る人生を回避

できる道を選ぶチャンスはいくらでもあったんだよ!!!ぜったいに。愛しい人とめぐり逢え家族をもった時、子供たちをうんでもらった時、もっと強く、己に家族を守る責務、子供を育てる責任を認識しなければいけなかったし、その事を考えれば、現状から逃げだしてでも、家族を人並みに守れる環境を作らなければダメだったんだ。

常にイエスマンであり、他人を見くだし、傷つける事が「男を捨てない」事じゃなくて、イエス、ノーをはっきり言えて、家族が辛い時こそ、一緒に最善を考えてあげられる事が男のつよさと思う。48年生きて来て、ようやく、このコロナ禍でも家族をやしないつづけてる女性や男性をみて、わかって来たさ。いつだって大切なものを失くしてから後悔して、どれだけ大切だったかを気づくんだよ、オレ。何かごめん、佳代子姉。辛言苦言を言ってくれるファミリーリヤーマーノがいてくれるから今のオレがある事に感謝！

## 反響の手紙 その3

PJ 事務局長 汪 楠

会員からのお手紙は江戸川区本部に送られた分でも、神奈川支部に送られた分でも事務局長の私と専属スタッフの庄子さんは必ず目を通しています。

それも1回とかではなく、平均しても3回以上は読みます。そのうえで担当の文通スタッフにLINEで共有し、または購入代行担当のスタッフと共有するようになっていきます。無償本は本部で保管している関係で、月に1~2回だ

け事務局に数名のスタッフが集まり、リクエストに応じてピックアップし発送しています。

さてその手紙ですが、内容から判断して「かえるのうた」に掲載することがあります。趣旨としては支援者である外部会員とスタッフに内部会員のことをより理解してもらうためと、内部会員に自分のことを話す場を提供し、それによって反省とまで言えなくても各々の人生を考えるきっかけになればという思いで、設立当初からこのコーナーを作りました。

今まで掲載された手紙についてもいろいろな反響がありました。今回はNさんの手紙については特に反響が大きかった。そこで私の個人の意見を含めてここに投稿し、皆様にさらに考えていただけたらと思います。

いま手元に「その1」の手紙があります。これを仕事の合間に読み、移動中の車でも読み直して、正論と思いました。これは何もNさんの考えを否定している意味ではありません。世間的に言えば皆さんにそれぞれの考えがあり、また日本国憲法でも表現の自由を保障しています。

Nさんの手紙はなんだか無期懲役囚はどうであるべきかのような論争になっていますが、もっと考えると、有期刑も同じで、究極的に考えれば、自分はどうであるべきかという問題にぶつかるかと思います。

殺人だろうと、泥棒だろうと、私たち加害者のほかに被害者がいます。殺人は修復不可能な犯罪といわれること

もあります。でもほかの犯罪も修復可能でしょうか？盗んだお金を全額返せる人はどのくらいいます？人を殴り、その痛み悲しみを修復できます？そして私たちの家族がどんなつらい思いをしたか、考えたことはありますか？

それらを考えると、死ぬしかないときえ思う時期がありました。でももうとうと今も生きているのは事実です。

刑務所は社会の縮図とよく言われます。私は中国生まれで、日本には14歳できました。今は49歳ですから日本で35年間暮らしたことになります。日本に来てすぐにいじめを受け、外人ゆえに差別も受けました。刑務所もまた同じです。新人いびりは初犯刑務所だろうと再犯刑務所だろうと必ず起きる問題です。そこには日本の特殊性があるように思います。

日本は礼儀正しい国と言われていません。そこは認めます。しかし、その一方では同調圧力もすごいのです。お互いへの気遣いは本来そのコミュニティに属する人に暮らしやすさを提供するものですが、日本の場合はそれが行き過ぎて、私がここまで気を遣っているから、あなたもそうしなさいよという同調圧力に変質し、むしろ住みにくくしている面があります。刑務所では特に顕著で、いじめはド正論で説教という形で行われがちです。

だから刑務所はパワハラが横行していると同時にモラハラも問題になっています。その被害を受けるのは他人への思いやりが強く、優しい性格の人、加害者になりやすいのは自己愛が強い人、刑務所用語でいえば、我が強い人。

なぜか威張り、自分で作ったルールを他人に押し付け、それは集団生活をする上では必要なものと主張する。実際は弱い人にしか言えないものが多く、ただの弱いものいじめである。

このような弱肉強食の世界で絆というものは人と人との結びつき、支え合いや助け合いという意味合いからかけ離れ、徒党を組むほうの意味合いが強くなり、このフレーズを好む者の多くは一蓮托生という言葉をも好むケースが多い。「その1」の人はそこを指摘していると思います。さらに言えば男という言葉にも違和感を覚えたように受け取れる。

私も有期刑ではありますが、服役経験があります。自分が無期刑と想像したときにどう生きるべきかを考えますが、気づいたのは、それは何も無期刑だから考えるべき問題ではなく、有期刑も同じくどう生きるべきかを考える必要があり、それは外の、言わば娑婆にいる人も考える必要のある問題に気付きました。

皆様の考えを知り、私も考えさせられてよかったと思います。

私はLB級の岐阜刑務所にて実刑13年を満期まで務めていました。2014年に出所したのですが、過剰収容の時期で、1000人を超えていました。6割は殺人で、無期懲役囚は300人以上もいました。当時の有期刑の最高は15年で、私はそれを求刑され、13年の刑を言い渡され、それこそ不貞腐れたまま移監されたのです。盛岡少年刑務所で務めた経験はあるとはいえ、28歳で逮捕さ

れ、31歳で岐阜刑務所に送られたときにはじめて無期懲役囚という存在を知り、そして同じ部屋で生活することになりました。

出所して7年になります。それでも印象に残る無期懲役囚（以下無期と略す）は数名います。筆頭は今も岐阜にて務めているO.Sさん。彼とは何回か同じ工場になり、同じ雑居（集団生活室）で生活したこともありました。刑事施設法改正後にもかかわらず刑務所は一般面会をなかなか許可しない現状にありますが、彼は弁護士に依頼することなく、独学で法律を勉強し、そして見事に勝訴もしています。彼は将棋囲碁の名人でもあり、何回も優勝するほどの腕前です。そして偏屈であった。私は「夜と霧」で有名なヴィクトル・フランクルのロゴセラピーに出会い、受刑中に学び始め、レポートみたいなものも提出していた。その手法を真似て彼に接触し、彼が隠していた事件を聞き出すこともあった。そのO.Sさんは私が関わっていた三つの団体にそれぞれ10年分の会費を納付し、また寄付もしています。

O.Sさんを分類するのは難しい。わかりやすく言えば出所する気はなさそう。反骨心は強く、いじめを見ると口出さずにいられない正義感を持ち、また刑務官の理不尽な指示にもとことん抵抗していたので、調査懲罰が日常茶飯事で、刑務官側の見方をすれば処遇困難であり、できればずっと昼夜独居処遇にしたい問題児でした。私が知っている無期の中では一番知能数が高い方でした。

もう一人は**通称寅さん**。もう獄死されています。彼は二つの殺人事件を犯したとして受刑していましたが、一件は認めています、もう一件はやってないとして否認していたので、否認である以上は出所などあり得なかったのです。彼とは木工場で一緒になり、自称ヤクザの5人に囲まれ喧嘩になった時、私は武器を持って抵抗していたところ、それまで話したこともないこの無期のおっちゃん**は鈍（なた）**をもって参戦してきて、私を含め全員がビビり、加勢してくれるとわかって安堵したのは今も覚えています。その寅さんは亡くなる1年前に自分の作業報奨金を弁護士に依頼して引き出し、全額私の活動に寄付するように弁護士に依頼した。その時点では私はまだホームレスや精神や身体障害者の支援活動をしていて、スタッフでしかなかったの、それほど資金を必要としなかったの、協議のうえ、いくつかの団体に寄付するようにした。最後まで本当に冤罪だったかは話してくれなかったけど、彼の性格から想像すると、本当にやっていない事件だったのではと彼を知る者はみな言っていました。

**通称よっちゃん**。戦争中に日本軍として中国に行き、強姦に強盗を上官の命令通りに実行し、生き残って復員後も今度は日本で同じことをやり、罪を問われての受刑生活。いわゆるムキムキというやつで、一つの殺人事件で無期刑を言い渡され刑を終えてから、また殺人事件を起こし2度目の無期刑を受刑中に獄死したのです。かれは帰還兵としてのPDSを抱えたまま平和な

戦後の中に放り込まれ、普通の生活に適応できなかった。刑務官を軍隊の上官のようにとらえ、決して逆らうことはなく、すべての指示を無条件で従っていました。彼は感情的な面を見せることはほとんどなかった。ロボットのようにひたすら次の指示命令を待ち、それがなければ何もできなかった。ときたま幻聴で別の命令を受けるから犯罪に走っただけかもしれません。

**通称和尚**。由来は水滸伝の登場人物の花和尚魯智深（ろちしん）の入れ墨をしていたから。中国では強姦犯のスラッグでもあるのですが、偶然にも彼は強姦魔でした。

**通称ヨッシー**。彼は典型的なアスペルガー障害の症状を有していたマッチョな殺し屋でした。存命中のため詳細は控えますが、やはりロボットのように誰かの命令だけで動き、人間関係に苦しむ社会不適合者でした。彼は聞かれたら出所したいと答えるが、出所するよりもいかにいじめられないかを考えるのが精いっぱいでした。

**通称まっちゃん**。いわゆる帰り無期。一つの事件で無期刑を受け、いったん出所するも外の生活になじめず、出所時の禁止事項の一つであった飲酒をした上で警察に飛び込み、もう一度受刑したいと申し出たの再収監。合計45年間刑務所で過ごし、出所後に生活が乱れ脳梗塞を患い、退院後の2年間はほんにかえるプロジェクトの常勤スタッフとして懸命に奉仕していた。彼が書記を務め、ユダヤ人風に言えばカポとして刑務官のご機嫌を取り、受刑者仲間を密告するのが使命のようにして、



自分から帰っていった刑務所を出たくてさらに25年間受刑した。「反省させると犯罪者になります」（新潮新書）の著者岡本茂樹が指摘したとおり、表向きの反省で出所しても自分の問題を全く理解していなくて、刑務所にいるうちは命令されるままに動けますが、出所したとたん何をするべきかもわからず、とにかく他人に対しては不平不満だらけでした。ほんにかえるプロジェクトに参加するようになり、井手シスターをはじめ女性スタッフと接するようになってからは落ち着きを取り戻し、少しずつ自分の人生も考えるようになりました。彼は殺人犯と言わず犯罪者全員は処刑するべきと公言していた。あなたも殺人犯と私は言えませんでした。

**通称シブジィ。**彼も出所したが、再犯しました。ある講演会で一緒にステージにのぼり、私は日本の刑務所の中でもいじめが多発し、また医療もずさんで、歯痛で治療を申し出てから3か月後にやっと医者と呼ばれ、そのころになるともうどの歯が痛かったのかも忘れるみたいな趣旨の発言をしたのですが、彼は私のマイクを奪い、日本の刑務所は素晴らしいところです。私が風邪でせき込むだけで刑務官が医者を部屋まで呼んでくれたし、私のよう悪人を親切に接し真人間に更生させてくれましたと発言。しかし講演会の控室で私に覚せい剤の入手ルートを訪ね、地元の大阪に戻ればいくらでも手に入るのにとぼやいていました。そして念願通りに大阪に戻るとスナックのホステスに誘われ、闇カジノで二日間も勝

ち、賭博の才能があると自慢の電話をしてきた翌日は、つけ馬のヤクザとともに東京に帰ってきて、全財産を取られた。

ほんにかえるプロジェクトは設立してから7年目に入ります。内部会員の7割は無期という時期もありました。いまでも最も会員数が多いのは宮城刑務所であり、その多くは無期である。

彼たちと長年文通してきました。思うこともいっぱいありますが、ここではコメントを控えます。ほんにかえるプロジェクトは更生を支援する団体ではありますが、更生しろと強要することはありません。

更生するかどうか本人の自由であり、ただ経験者として言えば犯罪は被害者だけではなく、加害者をも不幸にします。犯罪をしないことに越したことはない。刑務所が辛いからもう犯罪はしないのではなく、犯罪は自分の人生にとっても、また社会にとっても不要なものと考えます。

「かえるのうた」はこのような手紙を掲載して皆様が各々の幸福を考え、今後どう生きるかを考えるきっかけを作りたい。そして更生したいと思った時はいつでも遅くない。私たちは可能な限り応援したいと思います。例えば再犯しても私たちに対しての裏切りと考える必要はありません。またやり直したい時に私たちはあなたたちのそばにいます。

## プリズンブックレビュー

Y.I.さんの手紙より

### ●宮部みゆきにはまっています

私は、宮部みゆきは「火車」で心をつかまれて、今「ソロモンの偽証」全6巻の⑤まで読んでいるのですが、次が、楽しみで楽しみで、しょうがないっす。このソロモン～読んでいる時はテレビいらないですもん。居室に早く帰って読みたいってなります。こういう夢中になれる本は、そうそうないけど、出会えた時は、幸せ感じちゃいます。今「英雄の書」(宮部みゆき)読み始めましたが、面白くなりそうな予感です(笑)。ゲッツ板谷は「ワルボロ」「ズタボロ」「メタボロ」がまさしく一気読みの楽しさでドはまりしちやいました。「バカの瞬発力」や「極選・板谷番長」などまだまだ未読の作品が沢山あるので楽しみにしています。

「夜のピクニック」(恩田陸)は、自分がそこにいる様な感じになる、ドはまり出来る小説でした。

誉田哲也の「ストロベリーナイト」から始まる姫川刑事シリーズやジウ①②③も本当に面白く絶品なのですが、私がそれ以上に好きなのが「武士道シックスティーン」シリーズです。この誉田先生が書く、女性達って何でこんなにすばらしいんでしょうか?もし未読ならぜひ。

### ●お気に入りの1冊

全ての本の内で私の1番の、お気に入り、西尾維新の「化物語(バケモノガタリ)」シリーズです。この西尾作品は、とにかく会話が楽しい。工場に新しい

人が入って来ると私は必ず西尾維新って知ってる?読む?って聞きます。もし、知ってる、読んでるってなれば間違いなく、仲良くなれるからです。独得の世界観は、好き嫌いがはっきり分かれるので万人受けする作家では、ありませんが、ぜひ一度手に取ってみて下さい。

### ●本屋大賞の作品を採点しました!

最近、読んだ本での、おすすめは「コンビニ人間」 村田沙耶香 2017 本屋大賞 9位 **85点**

「横道世之介」 吉田修一 2010 本屋大賞 3位 **90点**です。

特に「コンビニ人間」はスタート2.3Pでもう作中の世界に入って行ける作品でした。主人公のキャラに心うばわれちゃいました。「横道世之介」は、ほのぼのとした物語。映画になっているので、そちらもおすすめです。

その他、作品の点数は

「ペンギン ハイウェイ」 森見登美彦 2011 本屋大賞 3位 **60点**

「村上海賊の娘」 和田竜 2014 本屋大賞 1位 **70点**

「サラバ」 西加奈子 2015 本屋大賞 2位 **65点**

「ソロモンの偽証」 宮部みゆき 2013 本屋大賞 7位 **90点**

「私の神様」 小島慶子 **40点**  
庄子さんにプリントアウトしてもらった本屋大賞受賞リスト大変役に立っています。ありがとう

今は、このリストを見て差入れしてもらっているのでハズレがなく助かっています。次は「盤上の向日葵」2018 本屋大賞 2位を読みます。

## ♥雑居も悪くない

雑居ですと、自分の好きなジャンル以外の本が読めるのが楽しいです。

・「マチネの終わりに」 平野啓一郎  
・「糸」 林民夫 ・「きみの瞳が問いかけている」 沢木まひろ等、恋愛小説が好きな人、時代小説好き、ゲームものが好きな人と色々で楽しいです。

## ♥おすすめの旅本教えてください

沢木耕太郎の「深夜特急」以外でおすすめの旅本はありませんか？なかなか良い旅本に出会えてません。

## 事務局からのお知らせ ①

ほんにかえるプロジェクトは読書を進める活動をしています。そして受刑者の皆様も読書の機会に恵まれ、文通でも読んでいる本のことが話題になります。今回はY.Iさんの手紙を掲載しました。

そこで皆様がお勧めの本がありましたら紙面が許す限り公開していきたいと思えます。暫定的ですが、「プリズンブックレビュー」というコーナーを新設しました。受刑者の読書傾向を知っていただくのも結構ですし、受刑者のみなさんに読んでいただきたい本がありましたら、ぜひ支援者の方もご応募ください。

もちろん個人的には「怒羅権と私」をおすすめしたい。あれを読むとあなたの人生がばら色になります（嘘）。一家に一台ではなく、一冊はシロアリ被害の防止にもなります（嘘×嘘）。

## 事務局からのお知らせ ②

### <SNS 検索依頼について>

ネット検索は1回に2件(1件1項目)とお願いしています。しかし、「1件目」と書いて、その1件の中に10~20項目も記載されていることが希ではありません。「こんなにたくさんはお引き受けできません」とお断りすると、「発信枠があるので、1回の手紙にたくさん書かざるを得ないこちらの事情も理解してほしい」と言われます。出版社からの書名検索も引き受けていますが、「宝島社の本全部」などは1件とはいえ対応できません。私たちは皆さんの知りたい情報をできるだけ提供したいので、多少オーバーしていてもお断りすることは滅多にありません。でも時間も人手も限りがあるので、検索にあまり時間がかかるとこなしきれなくなります。検索は検索語を入れればたどころに知りたい情報が表示される訳では無く、場合に拠ってはいろいろなサイトを見て、まずそのテーマについて学ぶことから始まります。依頼者のニーズを考えながら役に立ちそうな部分探し、切り取り、まとめる作業は時間がかかります。閉ざされた環境の中で、知りたいことが溢れて出る様子は想像に難くありません。しかしこちらのキャパを考慮してご配慮ください。

## 誕生カードをお贈りしました

誕生カード担当 M.ロザリア綾

主はあなたのために、御使いに命じて  
／あなたの道のどこにおいても守らせて  
くださる。(詩編91章11節)

皆様、お元気でお過ごしですか。秋らしく爽やかな日が増えてきましたね。中秋の名月(9月21日)はご覧になりましたか。満月だったのは8年ぶりとか。関東地方は晴れて、きれいなお月様を見ることができました。

さて今回は誕生カードが皆様のお手元に届くまで…をお知らせします。

カードはすべて(一年通して)一人の方の手作りです! 季節ごとにデザインを変え、特殊なパンチを数種類使って切り貼りし、仕上げます。植物を題材にすることが多いです(写真)。

文章の書き手は10人です。季節のこと、町の様子、話題になっていることなど、各々が心に留まったことを書いています。カードはできるだけ、誕生日に合わせてお届けできるように投函しています。一年で計122名の皆様にお届けしています。カード作りも書き手もお祝いの心を込めて贈らせていただいております。お誕生日にはどうぞ楽しみにお待ちくださいね!



かえるのうた

### 外部会員募集

年会費 3000 円。  
寄付もお待ちしております。

#### 振込先

ゆうちょ銀行 10160-86239211

他行からの場合

ゆうちょ銀行〇一八支店

(普) 8623921

口座名義: ほんにかえるプロジェクト

### ボランティア募集

在宅ワーク: 検索・文通スタッフ

自宅住所は公開しません。

プロジェクトの活動資金捻出の一環として汪楠が書いた小冊子を販売しています。

「我的童年」(私の生い立ち)、  
「獄中日記」

A5 サイズ 各 500 円

好評につき、新装版の作成を検討中です。

### <ガチャ本>

会報と一緒に本を1~2冊同封することがあります。郵便料金があまり変わらないのでつい送りがたくなります。当たりハズレあり。読みたい本でない場合もあるかと思いますが、迷惑な方は申し出てください。できるだけ送らないようにします。

### 発行所

〒134-0003 東京都江戸川区

春江町 5-15-31

ほんにかえるプロジェクト事務局

電話 080-8811-5465